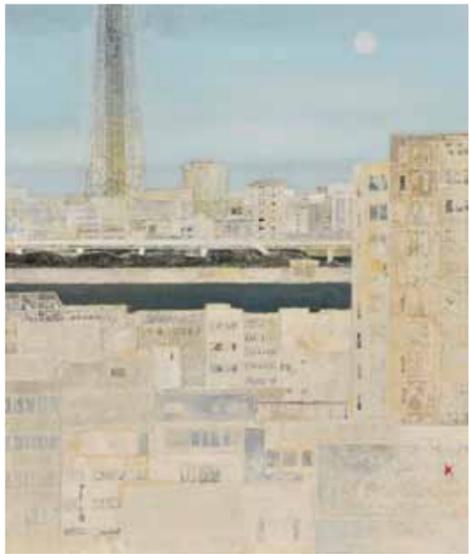
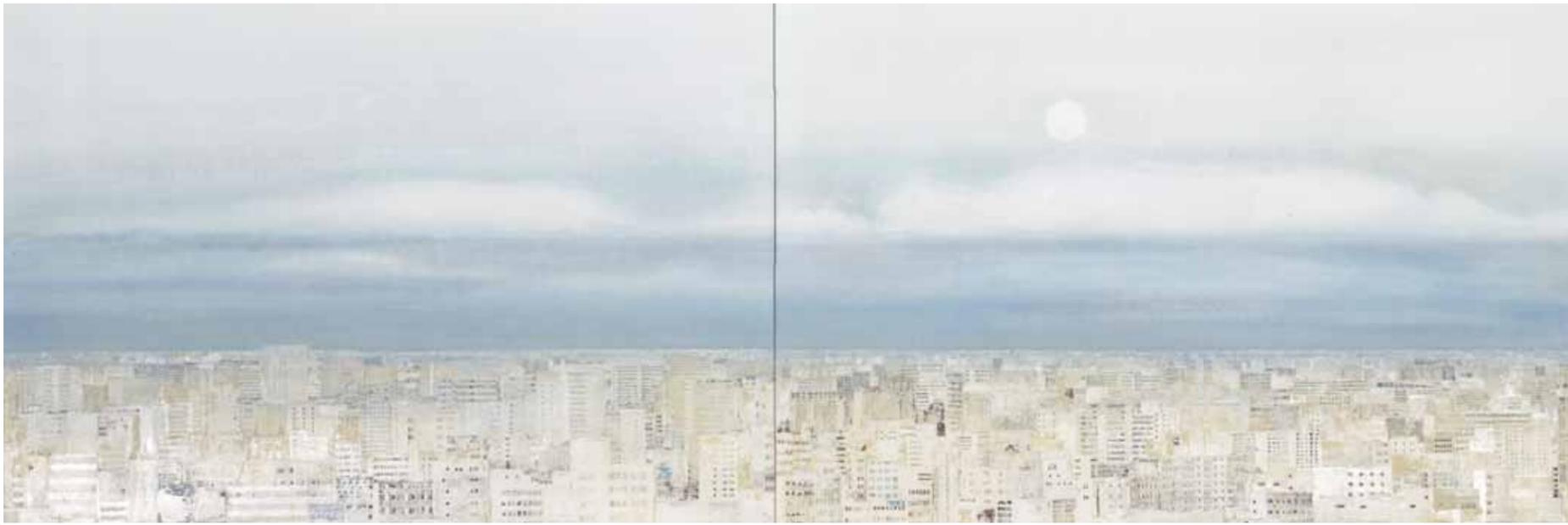


「WJ+S賞受賞記念展」  
長澤耕平 日本画展  
— 彼岸の街 —

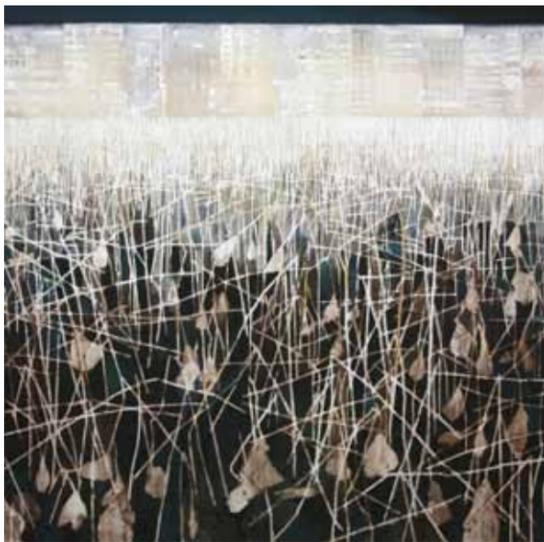
【会期】 7月24日(水)～7月30日(火)  
※最終日は同会場のみ午後4時閉場  
【会場】 西武池袋本店  
本館6階IIアート・ギャラリー  
豊島区南池袋1-28-1  
03(5949)5348(直通電話)



「水面とスカイツリー」8号F



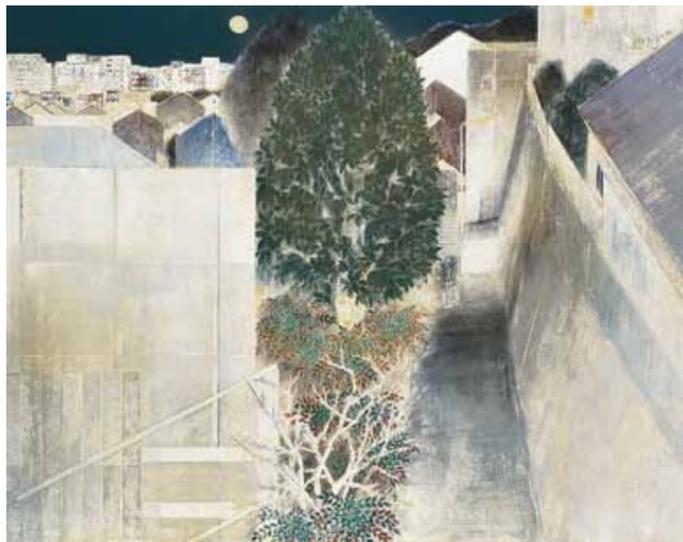
「月明りの街」風呂先屏風 62×195cm



「彼岸の街 (不忍池)」50号S



「ふたつの坂道の風景」30号



「蛸坂の風景」30号



ながさわ・こうへい

1985年東京都生まれ。2012年東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻日本画研究分野修了、修了制作東京藝術大学買い上げ。15年同大学院博士後期課程美術専攻日本画研究領域修了、博士号(美術)取得、野村美術賞、修了作品東京藝術大学収蔵。現在東京藝術大学日本画研究室非常勤講師、創画会会友。

世界のゆらぎ

ビルディングが屹立する都市の風景など、無数のモチーフが密集したイメージを描き出している長澤耕平。創画会とそごう・西武が合同で行う展覧会「WJ+S展」の第2回展において、最高賞であるWJ+S賞を受賞したことを記念した展覧会が開催される。

大学在籍時よりモチーフとして取り入れている都市の風景が、絵画表現における長澤の関心を引き続けている。無数の個体が集まることで一種のエネルギーを放出するという経験に覚えがある人も多だろう。そうした光景に画家として関与していく面白さに加えて、長澤は「複数のものごとの間に生じるゆらぎ」ということをテーマとして掲げてきた。揺らぎを含む都市のリアルを絵画において表現しようと試みている。

「ある風景にまつわる認識は、一枚の写真のような単一の視点のみによって構成されているわけではないと思います。動き回る視点と視覚以外の感覚を総合した“記憶”によってその場所の認識が出来上っているはずです。そうしたリアルな“記憶の風景”を描くために、モチーフとする場所の周囲を歩き回り、記憶を構成するディテールを収集します。そうしたディテールをキュビズムのように組み合わせひとつの風景を形づくっていきます」

一定の秩序に従って計画・造成されていく都市は合理主義が端的に表れる無機質なものが、生活の営みによって有機性を引き寄せるというゆがみを持つ。長澤は当初そうした観点で都市に迫っていたが、近年ではより個人的な観点を取り入れ、自己と他者の狭間・境界やそこに漂う叙情性へと関心を向けているという。

「以前は航空写真のような視点で都市を描いていましたが、近年ではより“ふつう”の視点/人の視点で描こうとしています。複数の視点を統合したり、実際にはない視点をも組み合わせながらも、ひとつの風景としては違和感なく見せられるように意識して制作しています」

今展ではそうした自己と他者との境界への関心を、「彼岸と此岸」という観点においてより明確に、具体的に意識している。人間は多くの隔たりの中に生きている。効率的な住環境を求めて自然から身を守る都市をつくり、共同体ごとに繋がり、家を持ってプライバシーを設ける。そして、自らが選択した結果の現在は過去に干渉することはできない。そうした無数の隔たりに人は「ありえたかもしれない現実」を夢想させる。あの時違った決断を下していれば今とは違う現実があったのか、違う人物として生きたら違う人生があったのか。そうした想念に縛られつつ、ありえた世界は遠い蜃気楼のように決して掴むことができない。そこに憧れを感じるか、郷愁を感じるかは人によるだろう。長澤は「ふたつの坂道の風景」では画面奥で交わることを暗示しつつも、平行する坂道として、「彼岸の街(不忍池)」では奥にうつすらとみえる街としてそれを表現している。様々な境界を包摂する都市をめぐって長澤が描き出す作品は、「彼岸と此岸」というテーマを経て、自他/彼岸と此岸でゆらぎながら生きる私たち自身のあり方を暗示的に表現している。今展では15～20点ほどが展覧される。創画会の俊英作家による真摯な表現を目に焼き付けたい。(編集部)